

文芸

俳句

秋の灯のひとつひとつに物語

池田 逸子
何がしの傷を負たる秋茄子

伊藤 敬子
寢息立つ母の枕辺隙間張る

今関満喜子
木犀や香りが先に家の中

魚地 照子
月天夫の寢息のしづかなる

江森 悦子
謹曼に戦後の味を懐かしむ

川島 通則
赤人の碑を尋ねたる花野かな

向後 寛
袴姿の昔思ほゆ文化の日

越川せつ子
はらはらと枯葉の海に吞まれけり

小松 藤男
台風の真つ直中の天の窓

佐瀬 輝夫
運動会一位取る気の面構え

椎名万里子
秋晴れや叙勲に映ゆる嬾かな

鈴木とし子
四大節の消えゆく言葉文化の日

鈴木 利子
冬耕やしつかと腰ににぎり飯

玉虫 栗扇

青き天一日照り射す文化の日

土屋美枝子
堂々の冬瓜一つ軒の前

土屋 義昭
風強し被りを深く冬耕す

戸村 静華
君が代を歌わぬ子等や文化の日

内藤 くに
烏瓜同じ蔓より赤青黄

早川 勇
歩幅てふ老の物指し露の道

藤田 雅夫
にぎやかな児童らの声今はなく

短歌

浅野 榮子※
校舎の中は数多の瓦礫

外を吹く風と雨意になりて
眠れずをり夜更けを独り

鈴木まさ子
門前に落葉積りてひめはるぜみの
発祥の地は人影のなし

加瀬 弘子※
見上げたる二重なす虹の彩りに

八角 三枝
浄土とふ場所ふとも思ひぬ

枝豆を挽ぐと幾年この畑に
足を運び来し友は今なき

青木 秀子
ひき久に吾娘と行きたるコンサート

シヨパンの曲に心奪はる

田崎 尚美

お日様に色深めたる梅干を
朝餉の膳に一粒そえぬ

椎名美枝子※
亡き母の歩みに同じ摺り足に

道ゆく嬾を見守りあたり

芹川 初子
新聞の休刊日なるを持て余し

水須 俊
菜園にしばし小豆挽ぎをり

西山満里子
競技見るテントの前を赤とんぼ

皿に載る秋刀魚の塩焼き頭と尾
はみ出しをれば尚なほ美味し

押尾 輝子
JR男社会と思ひきや
女性車掌の笛に発車す

島田ますみ
川の辺に釣り人三人ぬか雨の
降り続く中に動くともなし

斉藤つね子
コトリという新聞入れる音がして
また静かな夜明けのつづく

高梨 キヨ
乳呑児の元氣な泣き声頼母しく

吾が家に明るき増えて賑やか

伊藤 定男
貼り紙に釘打つ位置の年毎に

低くなりたり秋深みゆく

越川 義則

※は新かな使いです。



むかしのアイロン

今回紹介する下の写真のひしゃくのような形をした物体は、今では想像もできないような道具である。銅製の丸い器に、木の柄がついていて、水を汲むか、運ぶために使うもののように見える。

これは火のしと呼ばれる道具で、銅製の器に火をおこした炭を入れ、熱くなったところで、着物に当ててしわを伸ばしたりした道具で、今でいうところのアイロンである。写真の道具は江戸時代のもので、銅の器部分は分厚く、重く作られていて、着物を伸ばすのに都合よく作られている。この火のしという道具は、平安時代から日本にあり、その姿形はほとんど変わらなかった。今日のように電気がなく、熱するのは



▶町で保管している火のし